

しんぱん
新版
しどうようもんしゆう
指導要文集

だいいっしろう

第一章

しんじん

信心の基本

きほん

みようほう

いだい
妙法の偉大さ

蒼蠅そうよう、驢尾きびに附ふして万里ばんりを渡り、碧蘿へきら、松頭しょうとうに懸かかつて
千尋せんじんを延ぶ。

(002) 立正安国論りっしょうあんこくろん

妙法みょうほうの偉大いだいさ36ページー9行

青あおバエも駿馬しゅんめの尾おにつかままつていいれば万里ばんりを行いくことができ、葛かずら
も大きな松まつの先さきにかかかつて千尋せんじんの高たかさにままでのびびることができまま
す。(青あおバエ、葛かずらは凡夫ぼんぷの譬たとえ、駿馬しゅんめ、大きな松まつは妙法みょうほうの譬たとえ)

いちねんさんぜん ほうもん

ほけきょう

ほんもんじゆりょうほん

もん

そこ

一念三千の法門は、ただ法華経の本門寿量品の文の底に

沈

りゆうじゆ

てんじん

し

拾

出

しずめたり。竜樹・天親、知ってしかもいまだひろい

わ てんだいちしや

懐

ださず。ただ我が天台智者のみ、これをいだけり。

(005 開目抄

みょうほう

いだい

妙法の偉大さ54ページー9行)

いちねんさんぜん

ほうもん

ほけきょう

ほんもん

じゆりょうほん

もん

そこ

一念三千の法門は、ただ法華経の本門・寿量品の文の底にの

りゆうじゆぼさつ

てんじんぼさつ

し

みしずめられているのです。このことを竜樹菩薩、天親菩薩は知っ

ひろ だ

てんだいちしやだいし

ていしましたが、拾い出してはいけません。ただわが天台智者大師のみ

ないしん さと

が、これを内心に悟っていたのです。

諸經しよきようは智者ちしやなお仏ほとけにならず、この經きようは愚人ぐにんも仏因ぶつゐんを種ううべし。

(005 開目抄かいもくしよう)

妙法みようほうの偉大いだいさ 117 ページー5 行

しゃくそん いんぎようかとく にほう みようほうれんげきよう ごじ ぐそく

釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す、

われ ごじ じゆじ じねん か いんが くだく ゆず

我らこの五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り

あた

与えたもう。

(006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄

によらいのめつこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう

みようほう いだい

妙法の偉大さ 134 ページー17行)

しゃくそん いんぎよう ほとけ っ しゆぎよう

釈尊の因行（仏になるために尽くしたすべての修行）と

かほう ほとけ ふくとく みようほうれんげきよう ごじ

果報（仏のもつすべての福德）は、すべて妙法蓮華経の五字

ごほんぞん わたし ごじ じゆじ

（御本尊）にそなわっています。 私たちはこの五字を受持すれば

しぜん いんが ゆず あた

自然にその因果を譲り与えられるのです。

「この好き良薬」とは寿量品の肝要たる名・体・宗・
用・教の南無妙法蓮華経これなり。

(006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄

妙法の偉大さ141ページー14行)

とき じゆせんがいしゆつげん

ほんもん しゃくそん きようじ

この時、地涌千界出現して、本門の釈尊を脇士となす

いちえんぶだいいいち ほんぞん くに た がっし しんたん

一閻浮提第一の本尊この国に立つべし。月支・震旦にいま

ほんぞんましま

だこの本尊有さず。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄

みようほう いだい

妙法の偉大さ146ページー4行）

きようしゃく よげん まつぼうじよくあく じだい じゆせんがい だいぼさつ

（経 釈の予言どおりの末法濁悪の）時代に地涌千界の大菩薩

よ あらわ ほんもん しゃくそん きようじ いちえんぶだいいいち ほんぞん

が世に現れて、本門の釈尊を脇士とする一閻浮提第一の本尊が

にほん こんりゆう ごほんぞん

この日本に建立されるのでありましよう。この御本尊はインドにも

ちゆうごく しゆつげん ごほんぞん

中国にもいまだ出現したことの無い御本尊なのです。

にちれん こう りやく す かんよう この

日蓮は広・略を捨てて肝要を好む。いわゆる、上行

じようぎよう

ぼさつしよでん みようほうれんげきよう ごじ

菩薩所伝の妙法蓮華経の五字なり。

ほっけしゆようしよう

(008) 法華取要抄

みようほう いだい

妙法の偉大さ 156 ページー14 行

ほんぞん
すぐ
もち
本尊とは勝れたるを用いるべし。

ほんぞんもんどうしよ
014 本尊問答抄

みようほう
いだい
妙法の偉大さ
303 ページー16 行

ほんぞん
本尊とは、もつともすぐれたるものをたてるべきです。

と い ほけきょう こころ 知
問うて云わく、法華經の意をもしらず、ただ

なんみょうほうれんげきょう

ごじしちじ

かぎ

いちにち

いっぺん

南無妙法蓮華經とばかり、五字七字に限って一日に一遍、

ひとつきないしいちねん

じゅうねん

いちごしょう

あいだ

いっぺん

とな

一月乃至一年・十年・一期生の間にただ一遍なんど唱え

きょうじゅう

あく

ひ

しあくしゅ

赴

ても、軽重の悪に引かれずして四悪趣におもむかず、つ

ふたい

くらい

至

いに不退の位にいたるべしや。

こた

い

答えて云わく、しかるべきなり。

033 法華經題目抄 (妙の三義の事)

ほけきょうだいもくしょう

みょう

さんぎ

こと

みょうほう

いだい

妙法の偉大さ 531 ページ 15 行

みょう 天竺には薩と云い、漢土には妙と云う。

みょう 妙とは具の義なり。具とは円満の義なり。

033 法華経題目抄 (妙の二義の事)

妙法の偉大さ 537 ページ 11 行

みょう 妙という言葉は、もともと天竺 (インド) で薩という言葉で、そ

れが漢土 (中国) では妙と訳されたのです。その妙とは具足と

いう意味であり、具足の具とは円満 (欠けるところなく、完全で満

ちたりること) という意味です。

ほけきよう し もの じ ゆえ みよう い しゃく
法華経は死せる者をも治するが故に妙と云う積なり

033 法華経題目抄 (妙の三義の事)
ほけきようだいもくしよう みよう さんぎ こと

みようほう いだい
妙法の偉大さ 541 ページ 12 行。

しんじつ

真実もつて秘文なり。

ひもん

真実もつて大事なり。

しんじつ

だいじ

真実もつて

しんじつ

たつと

尊きなり。

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経、

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経

(038 当体義抄

とうたいぎしやう

みようほう

妙法の偉大さ

いだい

620 ページー17行)

ほんじなんし きょうち みようほう しゃくぶつとう しりよ およ

本地難思の境智の妙法は、迹仏等の思慮に及ばず。いか

にいわんや菩薩・凡夫をや。

(042 立正観抄 りっしょうかんしやう)

妙法みようほうの偉大いだいさ 647 ページー11行

だいほうぼう ひと

みょうほうれんげきよう

じゆじ

たてまつ

大謗法の人たりというとも、妙法蓮華經を受持し奉る

みょうほうれんげきようほうべんぼん

い

いま

まつぼう

ところを、妙法蓮華經方便品とは云うなり。今、末法に

い まさ

にちれんとう

たぐ

みょうほうれんげきよう

入つて、正しく日蓮等の類いのことなり。妙法蓮華經の

たいない

にぜん

にんぼう

い

みょうほうれんげきようほうべんぼん

い

体内に爾前の人法を入るるを、妙法蓮華經方便品とは云

そくしんじようぶつ

によぜほんまつくきようとう

と

うなり。これを即身成仏とも如是本末究竟等とも説く。

(095 御義口伝

おんぎくでん

みょうほう

いだい

妙法の偉大さ 994 ページー1行)

漢高三尺の劍も一字の智劍に及ばざるなり。
妙の一字

の智劍をもつて、生死・煩惱の繩を切るなり。

(095 御義口伝

妙法の偉大さ
1040 ページ 17 行

むじようどう

「無上道」とは、南無妙法蓮華経これなり。

なんみようほうれんげきよう

おんぎくでん

095 御義口伝

みようほう

いだい

妙法の偉大さ

1044

ページー13行

ほけきようかんじほん

と

われしんみよう

あい

ただむじようどう

お

(法華経勸持品に説かれている「我身命を愛せず、但無上道を惜し

むじようどう

なんみようほうれんげきよう

む」の) 無上道とは南無妙法蓮華経のことです。

じんずうしりき

われ しゅじょう

ささほつほつ

ふ ま

「神通之力」とは、我ら衆生の作々発々と振る舞うところ

じんずう

い

ごくそつ

ざいにん

かしゃく

おと

ろを、「神通」と云うなり。獄卒の罪人を呵責する音も、

みな じんずうしりき

しょうじゅういめつしんらさんぜん

とうたい

皆「神通之力」なり。生住異滅森羅三千の当体、ことごと

じんずうしりき

たい

いま

にちれんとう

たぐ

こころ

とく「神通之力」の体なり。今、日蓮等の類いの意は、

そくしんじょうぶつ

かいかく

によらいひみつ

じんずうしりき

い

即身成仏と開覚するを、「如来秘密・神通之力」とは云う

じょうぶつ

ほか

じんずう

ひみつ

な

なり。成仏するより外の「神通」と「秘密」とはこれ無

むさ

さんじん

いちじ

え

きなり。この無作の三身をば、一字をもつて得たり。いわ

しん

いちじ

ゆる「信」の一字なり。

おんぎくでん

妙みょう法ほうの偉い大だいさ
1049 ページー5行)

いま になれんとう たぐ なんみょうほうれんげきよう とな たてまつ もの
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者の

けうじ まっぼうぐつう みょうきよう ほんぞん
「希有地」とは、末法弘通の明鏡たる本尊なり。

(095 御義口伝 おんぎくでん)

みょうほう いだい
妙法の偉大さ 1063 ページー16行

ほとけざいせ ほとけ しん ひと ほとけ 成 ひと ほとけ
仏在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の
めつご ほけきょう しん ひと ひと じようぶつ
滅後に法華経を信ずる人は「一りとして成仏せざること
なけん」、如来の金言なり。
によらい きんげん

(131 御衣並単衣御書

おんころもならびにひとえごしよ

みようほう いだい
妙法の偉大さ
1310 ページー15行)

詮せんずるところ、成じょうぶつ仏たいこうの大綱ほっけを法華とにこれを説よき、その余ゆえの網目もうもくは衆典しゅてんにこれを明あかす。法華ほっけのための網目もうもくなるが故ゆえに、法華ほっけの証文しょうもんにこれを引ひき用もちいるべきなり。

132 観心本尊得意抄

かんじんのほんぞんとくいししょう

みょうほう

いだい

妙法の偉大さ

1312

ページー12行

ほけきよう

にきよう

しやくもん

ほんもん

法華經にまた二經あり。いわゆる迹門と本門となり。

ほんじやく

そうい

すいか

てんち

いもく

本迹の相違は水火・天地の違目なり。

じびようだいししようごんじついもく

(139 治病大小権実違目)

みようほう

いだい

妙法の偉大さ

1330

ページー5行)

ほけきよう

ふた

ほうもん

しやくもん

ほんもん

法華經にまた二つの法門があります。いわゆる迹門と本門で

ほんもん

しやくもん

ちが

みず

ひ

てん

ち

さ

す。この本門と迹門との違いは、水と火と、天と地ほどの差があ

るのです。

いちねんさんぜん かんぼう ふた

一念三千の観法に二つあり。一には理、二には事なり。

てんだい でんぎようとう おんとき

天台・伝教等の御時には理なり。今は事なり。観念すで

まさ ゆえ

だいなん

いろ

かれ しやくもん

いちねんさんぜん

に勝る故に、大難また色まさる。彼は迹門の一念三千、

ほんもん

いちねんさんぜん

てんち

こと

これは本門の一念三千なり。天地はるかに殊なり

じびようだいしようごんじついもく

(139 治病大小権実違目

みようほう

いだい

妙法の偉大さ

1333

ページー12行)

ほけきょう にぜん ひ む しょうれつ せんじん ほん
法華経と爾前と引き向かえて勝劣・浅深を判ずるに、

とうぶんかせつ さんようあ にちれん ほうもん だいさん ほうもん
当分跨節のことに三様有り。日蓮が法門は第三の法門な

せけん ゆめ いち に もう だいさん
り。世間にほぼ夢のごとく一・二をば申せども、第三をば

もう そうろう だいさん ほうもん てんだい みようらく だんぎよう
申さず候。第三の法門は、天台・妙楽・伝教も、ほぼ

しめ ことお せん まっぼう
これを示せども、いまだ事了えず。詮ずるところ、末法の

いま ゆず あた
今に譲り与えしなり。

（140 常忍抄）

みようほう くだい
妙法の偉大さ
1336 ページー1行

ほけきょう いがい にぜん しょきよう くら おし しょうれつ
法華経とそれ以外の爾前の諸経とを比べて、教えの勝劣を

とうぶん いちおう かせつ さいおう た はんてい ごんじつ

当分（一往）、と跨節（再往）で立てわけて判定していくと、権実

そつたい にぜんきよう ほけきよう ほんじやくそうたい

相對（爾前経より法華経がすぐれていること）、本迹相對

ほけきようしやくもん ほんもん しゆだつそうたい

（法華経迹門より本門がすぐれていること）、種脱相對

だいしようにん ぶつぼう みつ

（大聖人の仏法がもつともすぐれていること）の三つになります

にちれん だいしようにん ぶつぼう だいさん ほうもん しゆだつそうたい

す。日蓮（大聖人）の仏法は第三の法門（種脱相對）です。

せけん ひと ごんじつ ほんじやくそうたい ほうり の

世間の人たちはわずかに権実、本迹相對の法理は述べています

だいさん もんていどくいちほんもん だいしようにん ぶつぼう なに

が、第三の文底独一本門（大聖人の仏法）については何もいっ

だいさん ほうもん てんだいだいし みようらくだいし でんぎようだいし

ていません。この第三の法門は天台大師、妙楽大師、伝教大師

しめ ぜんたい と

もあらあら示すことはしましたが、全体は説けなかつたのです。

けつきよく

まっぼう

こんじ

結局、末法の今時にゆずられたのです。

ほけきよう　しよぶつしゆつせ　いちだいじ　と　たま　そうろう　さん

法華經を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は、この三

だいひほう　ふく　きよう

大秘法を含みたる經にてわたらせ給えばなり。

さんだいひほうほうじようじ　さんだいひほうしよう

(160 三大秘法稟承事 (三大秘法抄))

妙法の偉大さ 1388 ページー11行

なんみようほうれんげきよう

もう

いちだい

かんじん

南無妙法蓮華經と申すは、一代の肝心たるのみならず、

ほけきよう　こころ

たい

しよせん

法華經の心なり、体なり、所詮なり。

166

曾谷入道殿御返事

(如是我聞の事)

そやにゆうどうどのごへんじ

によぜがもん

こと

妙法の偉大さ

みようほう

いだい

1438

ページー1行

種・熟・脱しゆ じゆく だつの法門ほうもん、法華經ほけきようの肝心かんじんなり。三世十方さんぜじつぽうの仏ほとけは、必ず妙法蓮華經みょうほうれんげきようの五字ごじを種しゆとして仏ほとけに成り給えな たまり。

(170 秋元御書あきもとごしよ)

妙法みょうほうの偉大いだいさ 1458 ページー9 行)

いま にちれん ぐつう ほうもん 狭 甚
今、日蓮が弘通する法門は、せばきようなれどもはなはだ
深
ふかし。

(194 四條金吾殿御返事 (煩惱即菩提の事)
しじょうきんごどのごへんじ ぼんのうそくぼだい こと

みようほう いだい
妙法の偉大さ 1520 ページー15行)

にちれん ひろ ほうもん せま
いま日蓮が弘めている法門は狭いようではありませんが、じつはた
ふか ほうもん
いへん深い法門なのです。

師子の筋を琴の絃にかけてこれを弾けば、余の一切の獣
の筋の絃、皆きらざるにやぶる。仏の説法をば師子吼と
申す。乃至、法華経は師子吼の第一なり。

195 四条金吾殿御返事 (梵音声の事)

妙法の偉大さ 1528 ページ 3 行

いちねんさんぜん しゆつしよ りやくかいさん じゆうによじつそう

一念三千の出処は略開三の十如実相なれども、義分は

ぎぶん

ほんもん かぎ にぜん しやくもん えぎほんもん しやくもん ほんもん えぎ

本門に限る。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義

ほんもん はんもん しんじつ えもんはんぎ ほんもん かぎ

判文なり。ただし、真実の依文判義は本門に限るべし。

じつしやうしやう

(238 十章抄

みやうほう いだい

妙法の偉大さ 1665 ページー7 行)

さんぜんたいせんせかい 一つ
三千大千世界に積みたる金銀等の財も、一つの如意宝珠
をばかうべからず。
替

(238 十章抄
じっしやうしやう)

みやうほう
妙法の偉大さ
いだい
1667 ページ 7 行

この法華經の本門の肝心・妙法蓮華經は、三世の諸仏の
万行万善の功徳を集めて五字となせり。この五字の内に
あに万戒の功徳を納めざらんや。

(239) 教行証御書

妙法の偉大さ
1676 ページ 9 行

ほけきよう いちじ だいち ばんぶつ しゅつしよう いちじ

法華經の一字は大地のごとし、万物を出生す。一字は

たいかい しゆる おき いちじ にちがつ してんげ

大海のごとし、衆流を納む。一字は日月のごとし、四天下

照 いちじへん つき つきへん ほとけ

をてらす。この一字変じて月となる。月変じて仏とな

いね へん なえ なえ へん くさ くさへん

る。稲は変じて苗となる。苗は変じて草となる。草変じて

こめ こめへん ひと ひとへん ほとけ によにん

米となる。米変じて人となる。人変じて仏となる。女人

へん みよう いちじ みよう いちじへん だいじよう しゃかぶつ

変じて妙の一字となる。妙の一字変じて台上の釈迦仏

となるべし。

(254) 王日殿御返事

おうにちどのごへんじ

みようほう いだい

妙法の偉大さ

1716

ページー11行

きよう いちもんいつく

ちようもん

たましい

染

ひと

この経を一文一句なりとも聴聞して神にそめん人は、

しょうじ

たいかい

わた

ふね

みようらくだいしい

いつく

生死の大海を渡るべき船なるべし。妙楽大師云わく「一句

たましい

そ

ひがん

たす

しゆい

も神に染めぬれば、ことごとく彼岸を資く。思惟・

しゆじゆう

なが

しゆうこう

ゆう

うんぬん

しょうじ

たいかい

わた

修習すれば、永く舟航に用たり」云々。生死の大海を渡

みようほうれんげきよう

ふね

叶

らんことは、妙法蓮華経の船にあらずんば、かなうべか

らず。

(258 椎地四郎殿御書

しいじのしろうどのごしよ

みようほう

いだい

妙法の偉大さ 1721 ページ 1 行

まんだら

もんじ

ごじしちじ

そうら

さんぜ

この曼陀羅は、文字は五字七字にて候えども、三世の

しよぶつ

おんし

いっさい

によん

じよぶつ

いんもん

めいど

諸仏の御師、一切の女人の成仏の印文なり。冥途には

灯

しで

やま

りようば

てん

にちがつ

ともしびとなり、死出の山にては良馬となり、天には日月

ち

しゆみせん

しようじかい

ふね

のごとし、地には須弥山のごとし。生死海の船なり、

じよぶつとくごう

ごうし

成仏得道の導師なり。

(261 妙法曼陀羅供養事

みようほうまんだらくようじ

みようほう

いだい

妙法の偉大さ 1726 ページ 7 行

まんだら

にちれんだいしようにん

あらわ

ほんぞん

もじ

この曼荼羅（日蓮大聖人が顕されたご本尊のこと）は、文字

ごじしちじ

さんぜ

しよぶつ

かこ

げんざい

みらい

しゆつげん

は五字七字ですけれども、三世の諸仏（過去・現在・未来に出現

ほとけ そうしやう

ほとけ

し

するあらゆる仏の総称のこと）が仏となった師であり、いつさい

じよせい じようぶつ

やくそく

いんもん

せきにん

お

お

の女性の成仏を約束する印文（責任を負うしるしとして推す、

はん きぎ

もじ

めいど

な

もの

版に刻まれた文字のこと）なのです。冥途（亡くなった者がいく

みち しご せかい

やみ

て

しで

やま

めいど

道、死後の世界）では闇を照らすともしびとなり、死出の山（冥途に

やま

りやうば

てん

たいよう

つき

ある山）では良馬となります。天にあつては、太陽や月のようなも

ち

しゆみせん

こだい

せかいかん

せかい

ちゆうしん

のであり、地にあつては須弥山（古代インドの世界観で世界の中心

じよざん

せいし

くかい

わた

ふね

にあるとされる高山）のようなものです。生死の苦海を渡る船であ

じようぶつとくどう

じようぶつ

みちび

し

り、成仏得道（成仏のこと）に導く師なのです。

ほけきょう　こころ　とういそくみょう　ふかいほんい　もう　ざいごう　す
法華經の心は、当位即妙・不改本位と申して、罪業を捨
てずして仏道を成ずるなり。

284　波木井三郎殿御返事

はきいさぶろうどのごへんじ　みようほう　いだい
妙法の偉大さ　1813　ページー17行

いったい みず 一滴の水を大海になげぬれば、三災にも失せず。一華を
ごじよう 寄 五浄によせぬれば、劫火にもしほまず。一豆を法華経にな
ほうかい はちす げぬれば、法界みな蓮なり

(289) 大豆御書 だいずごしよ

みようほう いだい 妙法の偉大さ 1819 ページー1行

いま まつぼう い

よきよう ほけきよう

栓

今、末法に入りぬれば、余経も法華経もせんなし、ただ

なんみようほうれんげきよう

もう い そうろう

南無妙法蓮華経なるべし。こう申し出だして候も

私 はか

しゃか たほう じつぼうしよぶつ

わたくしの計らいにはあらず、釈迦・多宝・十方諸仏・

じゆせんがい おんはか

なんみようほうれんげきよう よじ

地涌千界の御計らいなり。この南無妙法蓮華経に余事を

雑 僻 (こと)

まじえば、ゆゆしきひが事なり。

うえのどのごへんじ まつぼうようほう こと

315 上野殿御返事 (末法要法の事)

みようほう いだい

妙法の偉大さ 1874 ページ 13 行

今は末法に入ったのですから、余経 (爾前経) も法華経もまったく

意味はなく、ただ南無妙法蓮華経による以外には、成仏はかなわない

のです。このようにいうのは、私の勝手な考えではありません。釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌千界の菩薩がきめられたことなのです。

この南無妙法蓮華經に余事をまぜ入れることは大きな誤りです。

なんみようほうれんげきよう

しちじ

ほとけ

たね

そうら

ただ南無妙法蓮華經の七字のみこそ、
仏になる種には候

もう

ひと

嫉

もち

こうえの

え。これを申せば人はそねみて用いざりしを、
故上野

どの

しん

たま

ほとけ

な

たま

おのおの

殿、信じ給いしによりて仏に成らせ給いぬ。
各々はその

まつ

おんこころざし

遂

たも

りゆうま

付

蟬

末にて、この御志をとげ給うか。
竜馬につきぬるだに

せんり

飛

まつ

懸

薦

せんじん

攀

もう

は千里をとぶ、松にかかれるつたは千尋をよすと申すは、

これか。

322 九郎太郎殿御返事 (題目仏種の事)

くろうたろうどのごへんじ

だいもくぶつしゆ

こと

みようほう

いだい

妙法の偉大さ 1885 ページ 1 行

だいば

じようぶつ

りゆうによ

み

じようぶつ

提婆はこころの成仏をあらわし、
竜女は身の成仏をあ

いちだい

ぶんた

ほうもん

らわす。一代に分絶えたる法門なり。

324 上野殿御返事 (刀杖難の事)

うえのどのごへんじ

とうじょうなん

こと

みようほう

いだい

妙法の偉大さ
1889 ページ 7 行

ほけきよう もう
法華経と申すは、て と手に取ればその手やがてほとけ仏に成り、くち口
となに唱うればその口即ちほとけ仏なり。

335 上野尼御前御返事 (烏竜遺竜の事)
うえののあまごぜんごへんじ おりよういりよう

妙法の偉大さ みようほう いだい
1913 ページ 3 行

おん

ほけきよう

内

肝

心

いつさいきよう

この御まぼりは、法華経のうちのかんじん、一切経の

眼目

そうろう

てん

にちがつ

ち

だいおう

げんもくにて候。たとえば、天には日月、地には大王、

ひと

宝

なか

によいほうしゆ

珠

家

人には心、たからの中には如意宝珠のたま、いえには

柱

そうろう

はしらのようなることにて候

362

妙心尼御前御返事

(御本尊護持の事)

みようしんあまごぜんごへんじ

ごほんぞんごじ

こと

みようほう

いだい

妙法の偉大さ

1965

ページー7行

みよう もんじ

つき

ひ

ほし

鏡

この妙の文字は、月なり、日なり、星なり、かがみな

ころも

じき

はな

だいち

たいかい

り、衣なり、食なり、花なり、大地なり、大海なり。

いっさい

くどく

あ

みよう

もんじ

たも

一切の功徳を合わせて妙の文字とならせ給う。または

によいほうしゆ

珠

知

たも

如意宝珠のたまなり。かくのごとくしらせ給うべし。

365

妙心尼御前御返事

(妙の字功徳の事)

みようしんあまごせんごへんじ

みよう

じくどく こと

みようほう

いだい

妙法の偉大さ

1972

ページー16行

しよきよう ずいたい ほとけ いっさいしゆじよう こころ したが たも ゆえ

諸経は随他意なり。 仏、一切衆生の心に随い給う故

ほけきよう ずいじい いっさいしゆじよう ほとけ こころ したが

に。 法華経は随自意なり。 一切衆生を仏の心に随えた

しよきよう ぶっせつ しん しゆじよう こころ

り。 諸経は仏説なれども、これを信ずれば、衆生の心

なが ほとけ ほけきよう ぶっせつ ぶつち

にて永く仏にならず。 法華経は仏説なり、仏智なり。

いちじいってん ふか しん わ みすなわ ほとけ

一字一点もこれを深く信ずれば、我が身即ち仏となる。

にいけどのごしようそく

399 新池殿御消息

みようほう いだい

妙法の偉大さ 2059 ページー6行

ほけきょう じつご なか じつご しんじつ なか しんじつ
法華経は実語の中の実語なり。 真実の中の真実なり。

408 妙法みょうほう尼御前あまごぜん御返事ごへんじ (臨終りんじゆう一大事いちだいじの事)
こと

妙法みょうほうの偉大いだいさ 2102 ページ 14 行

いつさいきよう

なか

じゆりようほん

てん

にちがつな

一切経の中にこの寿量品ましまさずば、天に日月無く、

くに だいおう

さんかい たま

ひと

魂

な

国に大王なく、山海に玉なく、人にたましい無からんがご

じゆりようほん

いつさいきよう

徒

事

とし。されば、寿量品なくしては一切経いたずらごとな

ねな

くさ

久

源

かわ

とお

るべし。根無き草はひさしからず。みなもとなき河は遠か

おやな

こ

ひと

卑

せん

らず。親無き子は人にいやしまる。詮ずるところ、

じゆりようほん

かんじんなんみようほうれんげきよう

じつぼうさんぜ

しよぶつ

はは

寿量品の肝心南無妙法蓮華経こそ、十方三世の諸仏の母

おわ

そうら

にて御坐しまし候え

じゆりようほんとくいししよう

(421) 寿量品得意抄

みようほう

いだい

妙法の偉大さ

2143

ページー8行